

合鴨水稲同時作運動の展開と意義

徳野 貞雄

合鴨のヒナを水田に放飼することにより、水稲と合鴨を同時に育てながら、合鴨による完全除草および害虫駆除等のさまざまな効果を上げながら、完全無農薬栽培の技術確立をほぼおこないつつある合鴨水稲同時作が、ここ二年間、九州を軸に急速に広がつつある。合鴨水稲同時作は、単に、(1)完全無農薬農法としての技術革新にとどまらず、(2)水田の立体的利用に基づく(稲作+養鴨)の複合的経営をも可能にした。また(3)近年叫ばれている食の安全性や環境問題等の社会的ニーズにも適合する農法でもある。何よりも(4)農業が楽しくなり、老若男女を問わず田へ出ていくことを促進するなど、さまざまなプラス効果が発生している。

合鴨水稲同時作の急速な拡大は、前述した宮農上のプラス効果の成果もさることながら、独特の運動論としての展開過程にも注目しなければならない。まず、合鴨水稲同時作自体の技術確立が、福岡県桂川町の一百姓古野隆雄夫妻(拙稿、村落研究26集、課題報告「農業危機における農民の新たな対決」参照)によって確立された「百姓技術」であり、決して大学や研究機関によって確立された官制技

術でないこと。次に、合鴨水稲同時作の普及経路は、普及所や農協といった既成指導機関からの普及ではなく、有機無農薬栽培に関心をもつ農民の主体的参加や、有機農業研究会や百姓出合いの会等のメンバー(古野氏が所属活動してきた組織)を軸とした百姓のネットワークの普及展開がなされた。

と同時に、合鴨水稲同時作を単なる農法上、宮農上の革新にとどめるのではなく、日本の近代農政に対する具体的批判実践活動として位置づけ、運動論として自覚的に展開していこうという方向性も持ち、全国合鴨水稲会を平成四年一月に結成している。現在、会員約五百名。また鹿児島、熊本、宮崎、福岡、広島各県レベルでの合鴨水稲会も結成されてきている。会の活動は、合鴨フォーラム(二百名参加)を始め、現地検討会、鴨の調理流通講習会など多彩であるが、これらの組織活動は、農民の自主的参加と運営によって展開されている。

合鴨水稲同時作運動は、まだ初発的段階であり、課題や不確定部分も多くある。しかし、報告者自身がこの農法普及に当初より関わってきた経緯もあり、その経験をふまえて、合鴨水稲同時作運動の発生過程を報告したい。

(広島県立大学)